

研究授業と（全校）授業研究

今年は休み明けに大雪に見舞われることが多いようです。3連休があけた13日（火）。昨日から積もった雪が校庭を一面の銀世界に変えていました。雪が積もれば雪かきをしなければなりません。今週も教員と子どもたちが一緒に汗を流す姿から1日が始まりました。

今日は今年度3回目の図画工作科全校授業研究会。その前にライスカレーとカレーライスの違いのような話ですが、研究授業と授業研究の違いについて整理してみたいと思います。

研究授業は教育実習の期間に教生の先生が行います。

本学の実習の手引には「教師のもつ教授手段が研究の対象となる」と説明してあります。つまり教育実習の期間に学生が自分で（教材）研究したことを授業で実践することが研究授業です。

一方授業研究はどうでしょうか。

ここでは、「授業そのもの」が研究対象になります。ですから、指導案に始まり、教師の発問や板書、課題の設定の仕方、学習形態など授業を構成するありとあらゆるものが研究の対象になります。このように整理してみると、本校で行っているのは（全校）授業研究会なので、授業という事実について、どの角度から研究してもよい、ということになります。

『内外教育』の2月2日号で学習院大学の佐藤学先生が次のように述べています。

（前略）観察と学びの対象を教師の「教え方」から子どもの「学び」に転換することは重要である。正しい教え方は100通りある。いくら「教え方」を議論しても教師の対立が深まるだけである。評価や助言の交流ではなく、教室の事実から学んだことを交流することはもっと重要である。（中略）教室の事実からの学びを交流することで専門家としての成長が促進される。（後略）

ご指摘の通り、私も子どもの学びに焦点化して検討を行うことに賛成です。

では、もう一歩進んで考えてみましょう。子どもの学びが成立したかどうかをどのように検証すればよいのでしょうか。

1つは「学習感想（振り返り）」です。先日の末永先生の音楽の授業では「音楽日記」がありました。子どもが自分の言葉で振り返る時間を持ち、まとめることは学びが成立したかの大事な要素になると思います。

でも、「振り返り」まで待たなければ「学びが成立したか」検証できないのでしょうか。

ここが授業研究会後の検討会の一番のポイントです。30人いれば30人の授業や子どもの学びに対する見方・考え方があります。例えば、国語の時間に一度も挙手や、発言しなかった子どもに対して、この子に学びは成立していなかった、と断定できるのでしょうか。高学年になれば、「深い学び」に入ると対象をじっと見つめていたり、静かに考えたりするために「挙手」や「発言」といった姿に現れないことはよくあることです。子どもの学びを見取ることはそう易いことではありません。だからこそ、事後検討会の役割が大切です。検討会の中で、一人一人の参観者が自分の見取った子どもの学びを議論することが、私たちの授業をみる目を養うこと、ひいては授業力の向上につながります。

附属小で切磋琢磨の場と言えば「全校授業研究会」です。それは、教科部の提案に対して率直に意見を話すことも大事ですが、参観者がお互いの授業の見方・考え方を話し合うことで学び合い、高め合うことの方がより価値があります。5週連続の全校授業研究会の2回目。優れた授業者となるためにも、まずは優れた参観者になりたいものです。

（文責：副校長 手代木）

